

台湾情報誌

交流

2016年11月 *vol.908*

公益財団法人 交流協会
Interchange Association, Japan

台湾の大学との国際交流
～法政大学の事例から～



交流

2016年11月
vol.908

目次

CONTENTS

台湾の大学との国際交流 ～法政大学の事例から～ (福岡賢昌)	1
Computex 2016レポート VR(Virtual Reality)が注目を集めたComputex2016 (吉村 章)	10
片倉佳史の台湾歴史紀行 第三回 高雄 (3)一旗山と高雄近郊の都市を訪ねる (片倉佳史)	18
交流協会事業月間報告	32

※本誌に掲載されている記事などの内容や意見は、外部原稿を含め、執筆者個人に属し、公益財団法人交流協会の公式意見を示すものではありません。

※本誌は、利用者の判断・責任においてご利用ください。

万が一、本誌に基づく情報で不利益等の問題が生じた場合、公益財団法人交流協会は一切の責任を負いかねますのでご了承ください。

● ● 交流協会について ● ●

公益財団法人交流協会は外交関係のない日本と台湾との間で、非政府間の実務関係として維持するために、1972年に設立された法人であり、邦人保護や査証発給関連業務を含め、日台間の人的、経済的、文化的な交流維持発展のために積極的に活動しています。

東京本部の他に台北と高雄に事務所を有し、財源も大宗を国が支え、職員の多くも国等からの出向者が勤めています。

台湾の大学との国際交流 ～法政大学の事例から～

法政大学グローバル教養学部 (GIS) 准教授 福岡賢昌

1. はじめに

近年、様々な分野においてグローバル化が加速している。大学におけるグローバル化も例外ではない。世界的に教育プログラムの国境を越えた流動性が高まっており、いまや日本の大学は国内の大学だけでなく海外の大学との競争にさらされている。大学のグローバル化の定義は様々であるが、国内においては、その指標は主に外国人留学生数、日本人学生の留学者数、外国人教員数、英語での授業数、教員による国際的な研究等で測られている。そのため、現在、各大学はそれらの指標を念頭に入れながら、国際競争力の強化に力を入れている。

これまで日本人学生の留学と言えば、英語力を身に付けることを目的として欧米の語学学校や欧米の大学が付設する語学研修機関で学ぶことであった。しかし、英語でコミュニケーションが取れることが当たり前になりつつある現在社会においては、欧米の大学への留学目的は語学留学というより、むしろリングフランカである英語を活用し、現地の大学生と肩を並べて、自身の興味・関心のある分野を学ぶという形態に変わりつつある。また、英語力を身に付けることが留学の主目的でなくなるとしたら、当然非英語圏の大学等への留学も選択肢の一つとなろう。そのため、各大学は欧米以外の大学との提携にも本格的に注力し始めた。本稿で取り上げる法政大学もそのような取り組みを実践している大学の一つである。

本稿では非欧米大学の中でも台湾の大学を取り上げる。文部科学省の調査によると、2013年にお

ける日本人の大学生の主な留学先はアメリカがトップであり(19,334人)、以下、中国(17,226人)、台湾(5,798人)、イギリス(3,071人)、オーストラリア(1,732人)と続いているが、この上位5か国のうち台湾だけが、日本人留学生数の対前年比を上回っており¹、日本の大学生の留学先として台湾は安定した地位を築いていると言えるからである。

本稿ではまず、法政大学の国際化プロセスについて簡単に説明し、その後、法政大学と台湾の大学との国際交流における具体的な取り組みについて紹介する。

2. 法政大学の国際化プロセス

法政大学は全国でも学生の海外への留学者数が多い²。また、昨今では2012年に文部科学省の「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」、2016年に「スーパーグローバル大学創成支援」(タイプB:グローバル化牽引型)事業に採択される等、日本社会のグローバル化を牽引する大学の一つである³。大学の事務組織としては、これらの事業に採択されたことに伴い、2012年

¹ 2012年の日本人の留学者数はアメリカが19,568人、中国が21,126人、台湾が3,097人、イギリスが3,633人、オーストラリアが1,855人。

² 独立行政法人日本学生支援機構 (http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_s/2014/refl4_01.html)によると法政大学の日本人学生の海外へ留学する学生数は519人。一方、法政大学の外国人留学生の受け入れは2016年5月1日現在、学部で500人、大学院では256人(<http://www.global.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/2015/03/3614b4687b1284ca912a88614fd8fd2-1.pdf>)。

11月に「グローバル人材開発センター」が開設され、2014年11月にはこれまで大学の国際化を牽引してきた「国際交流センター」(後述する)と「グローバル人材開発センター」が統合されて新たな「グローバル教育センター」が開設された。

近年の法政大学の国際化への歩みは1970年代に遡る。1970年代前半ぐらいから海外の大学との交流が積極的に進められ、1977年にはのちの大学間交流の礎となる「国際交流センター」(先述したように2014年11月にグローバル教育センターに統合された)が設置された。また、1979年には法政大学創立100周年を記念し、財界、学生保護者、校友、教職員などによる寄付金の一部から「法政大学国際交流基金」(HIF)が創設されている。このHIFは法政大学の学生を海外へ送り出す奨学金留学制度であり、現在の派遣留学制度の前身となった⁴。

そして、1990年代に入ると、さらに海外の大学との交流が加速し、1997年にはこれまで交流を深めてきた海外の協定大学から広く交換留学生を受け入れることを目的としたESOPプログラム⁵が開設された。このプログラムでは日本語習得以外のすべての授業が英語で行われ、日本文学、社会、政治、経済などのテーマを中心としてアメリカやイギリスのようにゼミ形式中心の授業が展開され

ている。

さらに2000年代に入ると、2008年に学際研究インスティテュート(IGIS)⁶を基盤とした少人数制によるリベラルアーツ教育を行う学部が開設された。筆者が所属するグローバル教養学部(通称:GIS⁷)である。GISでは原則全ての講義が英語で行われるため、数多くの帰国子女が所属している。GISのリベラルアーツ教育は、いわゆる一般教養とは一線を画しており、グローバルな課題を既存分野の枠組みに拘らず、学際的・領域横断的に捉えて解決することに主眼が置かれている。また、今までの人文学・社会科学系学問の再編成を前提としており、5つの科目群(「Arts and Literature」「Linguistics and Language Acquisition」「Culture and Society」「International Relations and Governance」「Business and Economy」)で構成されている。旧来の一般教養と専門科目の区分もない。

その後、2010年代においては、文部科学省の事業に次々と採択され、大学のグローバル化を加速させたことは先に述べたとおりである。

このように法政大学ではこれまで国際交流センター等が中心となり、時代の要請に的確に応える形で、新たな学部の開設や様々な関連プログラムの拡充がはかられてきた。2016年10月現在、34ヶ国・地域、209大学・機関⁸と学術一般協定、研究者交流、派遣留学制度、語学研究プログラム、交換留学生受け入れプログラム、短期外国人留学

³ 世界で通用するレベルの教育研究を行う大学や、日本の大学の国際化を牽引するために先導的試行に挑戦する大学など、日本の高等教育の国際競争力を強化することを目的とし、積極的に国際化と大学改革を行う大学を重点的に支援することを目的とした事業で、37校の構想が採択された。スーパーグローバル大学創成支援における法政大学の構想名は、「課題解決先進国日本からサステイナブル社会を構想するグローバル大学の創成」。世界的な規模で多様な研究を法政大学に集結させ、自然環境のみならず、高度な教育を通じた安定的な経済社会の持続可能性や、長い歴史と多様な展開をしてきた文化の持続可能性を含め、日本だからこそなし得る「日本発」のサステイナブル教育の確立と発信を通じて、我が国社会のグローバル化を牽引する大学を目指すとしている。

⁴ 法政大学グローバル教育センターの website (<http://www.global.hosei.ac.jp/about/history/>) から一部抜粋。

⁵ ESOPとはExchange Students from Overseas Programの略。

⁶ 学際研究インスティテュート(IGIS)とはGISの基盤となった学部横断型国際教育プログラム。2006年に設置。

⁷ GISとはGlobal and Interdisciplinary Studiesの略。

⁸ 2016年10月現在、欧米が78校、オセアニア地域が7校、アジア地域が118校、アフリカ中南米が6校と協定を締結している。

生受け入れプログラム等の協定が締結されていることもその証左であろう。

以下、本稿の主旨である法政大学と台湾の大学との国際交流について述べたい。

3. 法政大学と台湾の大学との国際交流

(1) 法政大学と台湾における協定校

法政大学が台湾の大学と初めて協定を締結したのは1996年のことである。協定相手は国立中山大学であった（学生交換協定は1997年に締結）。その後、関係者の努力もあり、2008年に淡江大学と、2013年に文藻外語大学、実践大学等の6大学と、2014年に国立政治大学等の3大学と、2015年に輔仁大学等の2大学と学術一般協定が締結された。2016年10月現在においては、法政大学は13の台湾の大学と協定を締結している。この協定校数はアジア地域において、中国、韓国、ベトナムに次ぐ多さである⁹。2013年には、法政大学台北事務所¹⁰が協定校である淡江大学台北キャンパス内に設置される等、協定校数は今後さらに増加していくことが期待される。

実際、学生の台湾に対する関心については、日本と台湾の間に流れる歴史、治安の良さ、近年の中国語の習得熱の高まり、「春水堂」、「微熱山丘」等の飲食店の国内における人気等が牽引し高まっている。先にあげたデータからも分かるとおり、日本人学生の上位国への留学者数が軒並み減少す

⁹ アジア地域において、法政大学は中国47校、韓国21校、ベトナム19校と協定を締結している。

¹⁰ 台湾事務所は2013年4月8日に設置され、5月24日に同事務所の開所式を実施。同事務所では、法政大学についての外部からの問合せの際の各種対応、日本留学事情の一般的案内、同事務所内会議等スペースの管理・運営、本学教職員への対応など、法政大学の留学情報の提供、卒業生などへの会議スペースのサービスなどの提供を行っている（以上、http://www.hosei.ac.jp/koho/photo/2013/130530_02.htmlより一部抜粋）。



写真1 台北事務所除幕セレモニー

出所：法政大学グローバル教育センターの website
(http://www.hosei.ac.jp/koho/photo/2013/130530_02.html)より抜粋



写真2 台北事務所の前にて

出所：法政大学グローバル教育センターの website
(http://www.hosei.ac.jp/koho/photo/2013/130530_02.html)より抜粋

る中、台湾だけが増加しており、台湾への留学人気は決して衰えていない。

今後は学生同士の交流をさらに加速させていくことと同時に、研究者同士の学術交流等を通じた既存の協定校との関係性の深化も大いに期待されるであろう。そこで、以下、近年の法政大学と台湾の大学との関わりについて紹介したい。

(2) 台湾留学フェア・国際交流懇談会の実施（日本台湾教育センターとの協業）

日本の大学生の台湾への留学及び国際交流の促

進を目的として、台湾の大学の特色、入学方法、奨学金等についての説明会及び大学間の国際交流懇談会（両イベントともに日本台湾教育センター¹¹が主催）が、2012年以降、法政大学グローバル教育センター協力のもと、法政大学市ヶ谷キャンパスを会場として開催されている¹²。主な台湾の大学は国立台湾大学、国立成功大学、国立政治大学、国立台湾師範大学、台北医学大学、淡江大学等であり、2015年はそれらの大学を含む台湾の21大学、2016年は19大学がこれらのイベントに参加した¹³。筆者も2016年6月に初めて参加したが、会場は非常に熱気に溢れ、台湾の大学の日本の大学との関係性構築に対する強い意欲を垣間見ることができた。

これらのイベントは2012年以降、学生だけでなく、日本の大学関係者も数多く参加しており、将来の提携可能性等も含めた大学同士のマッチングに大きく寄与している。さらに、既存の協定校との関係性の深化の役割をも担っている。今後の継続的發展を期待したい。

（3）協定校に対する特別プログラムの実施

法政大学は2009年度以降、毎年、協定校（国立中山大学、国立政治大学、淡江大学）の短期留学プログラム等の一環として、日本の大学における

¹¹ 日本台湾教育センターは、台湾教育部と財団法人高等教育国際合作基金会在日本と台湾の学術交流を深めるため設立された組織。「日本台湾教育センター」の業務の運営を台湾の淡江大学が委託。法政大学と淡江大学は学術一般協定、学生交流協定を締結していることから、日本台湾教育センターは法政大学キャンパス内にて業務を行っている。

¹² 法政大学市ヶ谷キャンパスを会場としているその他の例としては、台湾教育部が行っている華語文能力試験がある。華語文能力試験は2014年以降、年に2回、法政大学で実施されている。

¹³ 2012年、2013年、2015年は留学説明会を実施。それぞれ6大学、9大学、21大学が参加した。2014年と2016年は大学間交流懇談会を実施。それぞれ11大学、19大学が参加した。



写真3 台湾日本大学間国際交流懇談会

出所：日本台湾教育センター

講義の受講及び日系企業研究を目的として来日した学生（主に経営学を主専攻とする大学生及び大学院生）に対して、国際交流センターが中心となり、英語による特別プログラムを提供してきた。そして、このプログラムは法政大学と台湾の協定校との連携や関係性の強化及び学生交流の推進にこれまで大きく貢献してきた。以下、その特別プログラムの概要について述べたい。

〈2009年度・第1回〉

2010年1月20日～22日、国立中山大学のCollege of Managementの学生51人が市ヶ谷キャンパスを訪問。同大学が主催する短期留学プログラム(Study Abroad Program Asia)の一環で来日した。法政大学経営学部及びデザイン工学部の協力のもと20日、21日には経営学部にも所属する3名の教員、デザイン工学部にも所属する教員1名による特別講義が実施された。22日には株式会社日立製作所及び三菱商事株式会社を訪問。各社の概要・国際展開の説明ならびに最新製品やビジネスモデルの紹介などが行われた。

〈2010年度・第2回〉

2010年11月24日～11月25日、国立中山大学のCollege of Managementの学生19人が市ヶ谷

キャンパスを訪問。法政大学経営学部及びデザイン工学部の協力のもと特別プログラムが実施された。11月24日にはロジスティックマネジメントをテーマとして経営学部にも所属する3名の教員、デザイン工学部にも所属する教員1名による特別講義が実施された。翌日の11月25日には、学生たちは株式会社日立製作所及びヤマト運輸株式会社を訪問した。

〈2011年度〉

東日本大震災の影響で開催せず。

〈2012年度・第3回・第4回〉

2011年度は東日本大震災の影響で開催することが出来なかったため、2012年度に2回開催することとなった。

2012年5月21日～25日、国立中山大学の学生37人が市ヶ谷キャンパスを訪問。2012年5月21日と22日には、ロジスティックマネジメントをテーマに法政大学経営学部及びデザイン工学部協力のもと特別プログラムが実施され、学生はデザイン工学部に所属する教員1名、経営学部にも所属する教員3名の講義を受講した。5月24日には株式会社日立製作所とヤマト運輸株式会社、5月25日には新日本製鐵株式会社と横浜港埠頭株式会社(大黒ふ頭C-4コンテナターミナル)を訪問。各訪問先では会社・施設概要、最新製品の紹介ならびに国際展開等についての講義を受けた。特にヤマト運輸株式会社ならびに横浜港埠頭株式会社では物流センターやコンテナターミナルの見学等が行われた。

11月26日と27日、国立中山大学ならびに国立政治大学の学生40名が市ヶ谷キャンパスを訪問。日本の経済、経営およびロジスティクスマネジメントをテーマに法政大学イノベーション・マネジ

メント研究センター及びデザイン工学部の協力のもと特別プログラムが実施された。学生は法政大学経営学部にも所属する教員3名及びデザイン工学部にも所属する教員1名による講義を受講。11月27日には株式会社日立製作所と東京セキスイハイム工業株式会社を訪問した。各訪問先では会社・施設概要、最新製品の紹介ならびに工場内の見学等が行われた。

〈2013年度・第5回〉

2013年11月25日～29日、国立中山大学および国立政治大学の学生75名が市ヶ谷キャンパスを訪問。法政大学経営学部及びデザイン工学部協力のもと特別プログラムが実施された。学生は法政大学経営学部にも所属する3名の教員とESOPにも所属する講師1名の講義を受講し、経営学部にも所属する2名の教員のゼミに参加した。その後、株式会社日立製作所、ヤマト運輸株式会社、横浜市役所港南局等を訪問した。特にヤマト運輸株式会社では、羽田クロノゲートを見学した。

〈2014年度・第6回〉

2014年11月25日～28日、国立政治大学が主催し、国立政治大学および淡江大学より学生33名が市ヶ谷キャンパスを訪問(第6回より主催大学が国立中山大学から国立政治大学へ変更となった)。法政大学経営学部、グローバル教養学部(GIS)、ESOPの協力のもと特別プログラムが実施された。学生は経営学部にも所属する2名の教員、グローバル教養学部(GIS)にも所属する1名の教員、ESOPの1名の講師による講義を受講。その後、株式会社日立製作所、積水化学工業株式会社、ヤマト運輸株式会社等を訪問した。

〈2015年度・第7回〉

11月30日～12月1日に国立政治大学が主催し、国立政治大学および淡江大学より学生31名

が市ヶ谷キャンパスを訪問。法政大学グローバル教養学部（GIS）の協力のもと特別プログラムが実施された。学生は GIS に所属する経営学を専門とする 2 名の教員の講義を受講し、その後、経営学部に所属する 1 名の教員のゼミに参加した。また、株式会社日立製作所及び丸紅株式会社を訪問した。

* 同年 5 月 18 日～20 日には、国立中山大学の Information Management 専攻の学生（学部生 33 名、大学院生 32 名）が市ヶ谷キャンパスを訪問。法政大学経営学部の協力のもと、特別プログラムが実施された。学生は経営学部に所属する教員 3 名の講義を受講。その後、株式会社日立製作所、三菱商事株式会社等を訪問した。特に株式会社日立製作所では、ショールームの見学、シミュレーションエリアでのインタラクティブプレゼンテーションを体験した。

* 同年 10 月 8 日には、国立中山大学（台湾）管理学院 EMBA（Executive Master of Business Administration）の短期留学プログラムに参加している学生 25 名が市ヶ谷キャンパスを訪問。学生は法政大学の経済学部所属の教員等による講義を受講した。

〈2016 年度・第 8 回〉

11 月に国立政治大学が主催し、国立政治大学及び淡江大学より学生が市ヶ谷キャンパスを訪問し法政大学の教員の講義を受講予定。また、株式会社日立製作所、不二製油株式会社、NTT DoCoMo R&D センター（YRP 野比）等を訪問予定。特に NTT DoCoMo R&D センターでは研究開発中の技術・製品を体験する予定である。

このように、台湾の協定校の経営学を学ぶ学生に対する英語による特別プログラムの提供は、今



写真 4 筆者による講義風景

出所：法政大学グローバル教育センターの website
(<http://www.global.hosei.ac.jp/news/news-2015-5614/>)
より抜粋



写真 5 歓迎レセプションでの参加者集合写真

出所：法政大学グローバル教育センターの website
(<http://www.global.hosei.ac.jp/news/news-2015-5614/>)
より抜粋

年度（2016 年度）で 8 回目を迎える。また、2015 年には、国立中山大学の学生（information management 及び EMBA の学生）を単独で受け入れている。筆者は第 7 回（2015 年度）に初めて特別講義「Global Business Management in Japanese Companies」を担当したが（本年度も講義を担当する予定）、講義後には数多くの質問を受ける等、台湾の学生の学ぶ姿勢や少しでも多くの知識を筆者から吸収しようとするその貪欲さには目を見張

るものがあった。また、日本のアニメ・マンガ等のソフトパワーだけでなく、将来のキャリアを見据えた日系企業の企業文化、労務管理、各種戦略等に対する彼らの興味・関心の高さも同時に伺い知ることができた。このような彼らのひた向きの姿勢・態度は日本の大学生も大いに見習って欲しいものである。

(4) 協定校（実践大学）での講義

前項で述べたように法政大学と台湾の協定校との交流は、主に台湾の協定校の学生が法政大学を訪問し、講義を受けるという形で行われてきた(教員同士の属人的な関係から、台湾の学生が法政大学のゼミを訪問し交流するという形は過去にあったようだが、極めて属人的なものであるため公式な記録が残っていない)。法政大学の教員が協定校に赴き、講義を行うというのはこれまで稀有なことであった。しかし、先述したように、関係性の深化のためには、台湾の学生を法政大学に受け



写真6 Summer Program のリーフレット

出所：実践大学の website (<http://www.uscoia.usc.edu.tw/app/news.php?Sn=641>) より抜粋



写真7 実践大学のキャンパス

出所：筆者撮影

入れるだけでなく、法政大学の教員や学生もまた、台湾の大学に留学あるいは訪問する等し、交流を加速させる必要があることは疑いの余地はないだろう。

そこで2016年の夏、日本台湾教育センター日本事務所の郭艶娜主任の仲介もあり、筆者は法政大学の協定校の一つである実践大学¹⁴の Summer Program (7月5日～14日まで台北キャンパスにて実施)に招聘され、教鞭を執った。この Summer Program に招聘された教員は筆者を含めて3名(韓国とタイの大学より各1名)である。招聘された教員は期間中、1日3時間30分、英語による集中講義を行う。筆者が担当した科目は「Brand Management」であった。この科目は実践大学管理学院 (College of Management) における国際企業英語学位課程 (English taught program in international business) の単位認定科目でもある。受講生は数人の留学生を含む約50名であり、約8割が女子学生であった。実践大学は1958年に「実践家政専科学校」を前身としている。そのため、その名残で今もなお、女子学生の在籍が多いのではないかと推察する。

¹⁴ 実践大学は台北と高雄にキャンパスがある。デザインの分野では世界的に有名な大学。

さて、講義では学術的な理論だけでなく、それを補完する事例を多く扱った。前半が理論、後半が理論に基づく事例紹介といった具合である。事例は意識的に日系企業のブランド戦略を取り上げ、また日本で流されているCM等の映像も多く用いた。そのため、学生の興味・関心をうまく惹くことができたように思える。受講者数は先述したように約50名であったため、筆者が所属するGISで実践しているようなインタラクティブな授業とはほど遠く、いわゆる講義形式にならざるを得なかった。しかし、講義中、多くの学生は筆者の講義に真剣に耳を傾け、真面目にノートをとっていた。さらに講義後においては、先述した国立政治大学や淡江大学の学生と同様、筆者は数多くの質問を受けた。これは、彼らの学習意欲及び日系企業に対する興味・関心の高さの証左であろう。

講義期間中、実践大学の国際長である郭壽旺博士の薦めと仲介もあり、受講学生とともに台北101を訪問し、広報責任者による台北101のマーケティング戦略を拝聴した。そこでは学生を含めた質疑応答も行われ、台北101が台北のシンボルとなるまでの緻密な戦略を伺い知ることができた。学生にとって台北101は身近な存在であり、また、前日に地域ブランドに関する理論と日本の事例を扱った講義を行ったため、この訪問は大変有意義なものになったと確信している。筆者としてもいくつかの理論を裏付ける良い事例となった。

さて、先述したように本講義は英語で行われたが、学生の英語力は総じて高かったと言えよう。筆者の英語での講義内容を理解し、その学術的な内容についての意見を英語で口頭あるいはエッセイ等で述べるのに全く困らないレベルであったからである。日本においても(「英語」を学ぶのではなく)「英語」で授業を行う学部(学科)は増加傾向にあり、筆者が所属するGISもその一つであるが、原則全ての科目を英語で行うプログラムの成

功の一つは、学生の入学時の高い英語力(4技能:読む・聞く・書く・話す)である。というのは英語力が低いと学生は日々の学術的な講義に付いていくことができず、結局、教育の質を落とさざるを得ないからである。GISは幸いにしてそのような状況に陥っていないが、これから英語で授業を行おうとしている(あるいは「行っている」)日本の大学のいくつかはこうした課題に直面する(あるいは「している」)だろう。さらに、学生の英語力以外に、英語で「インタラクティブ」な授業を展開できる日本人教員の確保もまた、日本の大学の課題であることを付記しておく。英語で書かれた原稿を丸読みするような授業は全く求められていない。

ところで、講義期間中、筆者には2名のTA(Teaching Assistant)がついた。1名は日本語が堪能な大学1年生、もう1名は流暢な英語を話す大学3年生であり、二人とも極めて優秀なTAであった。彼らは松山空港と宿泊先のホテルとの送迎を始めとし、講義資料のコピー・配布等、筆者が講義に集中することができるよう快適な環境を整えることを常に考えて行動してくれた。なお、学外における彼らとの連絡はEメールではなく、コミュニケーションアプリ(LINE〈ライン〉)だったことは、本稿の読者にとって興味深い事実ではないだろうか。

4. おわりに

本稿はまず、法政大学の国際化への歩みを簡単に振り返り、その後、法政大学の台湾における協定校について確認した。法政大学は2016年10月現在、13の台湾の大学と協定を締結しており、その協定校数はアジア地域において4番目の多さであった。次に日本台湾教育センターとの協業(台湾留学フェア・国際交流懇談会)について触れた後、法政大学と台湾の大学との具体的な取り組み

(a. 国立中山大学、国立政治大学、淡江大学の経営学を学ぶ学生に対する英語による特別プログラムの実施、b. 筆者による実践大学での講義) について自身の経験談も交えて述べた。

先述したように台湾は様々な理由から日本人の学生にとって安定した人気を保っており、今後も日本人留学生の増加が期待される。グローバル化は決して欧米化ではない。非欧米諸国の影響力も近年では強くなっており、それらの国を欠いてグローバル化を語ることは不可能である。そうした環境下において台湾は独特の地位を確立している。そのような台湾で学ぶことは日本の学生が得るものは大きい。しかし、日台の大学が抱えている事情、課題等が異なる中、今後、双方が互いに利益を享受するには、学生間交流の更なる推進に留まらず、双方が知恵を出し合いながら、大学間プログラムの連携、研究者同士の交流等をこれまで以上に活発化させるとともにより関係性を深化させていく必要があるのではないだろうか。

最後に、今回の寄稿は、法政大学グローバル教育センターが主催する国立政治大学及び淡江大学の学生に対して、昨年度に筆者が特別講義を行ったこと、そして、今夏に台湾の実践大学に招聘され講義する機会を得たことで、交流協会に声を掛けて頂いたことに端を発している。改めてこのような機会を頂いたことに対して感謝申し上げたい。

参考文献

〈インターネット〉

- ・独立行政法人日本学生機構の website (<http://www.jasso.go.jp/>)。
- ・法政大学グローバル教育センターの website (<http://www.global.hosei.ac.jp/>)。
- ・文部科学省の website (「日本人の海外留学者数」及び「外国人留学生在籍状況調査」等について、http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1345878.htm)。

〈資料等〉

- ・法政大学グローバル教育センターより頂いた資料。

VR (Virtual Reality) が注目を集めた Computex2016

台北市コンピューター協会東京事務所 駐日代表 吉村 章

「交流」8月号と10月号に続き、Computex 2016をレポートする。Computex2016は5月31日(火)から6月4日(土)まで世界貿易センターを中心に3つの会場で開催。出展企業1,602社、5,009小間の規模で開催された。バイヤー登録はアメリカ、日本、中国、香港、韓国をはじめ177の国と地域から4万969人。5日間の会期で行われた。(Computex2016について見どころや注目製品については機関誌「交流」8月号を参照)

今年のComputex2016には新たにベンチャーイベントであるInnoVEXが同時開催。こちらは5月31日(火曜日)から3日間の開催。信義区の世界貿易センター第3ホールで開催された。ベンチャー企業の出展を中心にセミナーやピッチイベントなど国内外から注目を集めたイベントになった。(InnoVEX2016について、ピッチが台湾で開催される意義やピッチイベントについての詳細は機関誌「交流」10月号を参照)

■ VR (Virtual Reality) 「仮想現実」が注目を集めた Computex2016

日本では今年はVR元年(?)と言われている。東京ゲームショウ(9/17-9/20 幕張メッセ)でもVR関連の技術やゲームコンテンツが注目を集めた。Computex2016では一足先にサムソンやHTCが体験コーナーを設置。大勢の人がVRの可能性を体感した。現在のところヘッドマウント・ディスプレイ(Head Mounted Display)でしのぎを削っているのはトップの5社。Play Station VR、Oculus Rift、HTC Vive、Google Daydream View、Samsung Gear VRである。

VR (Virtual Reality) とは「仮想現実」を意味

し、ヘッドマウント・ディスプレイ(Head Mounted Display)の中に作られた空間で、宇宙や戦場、海中や未来の地球など、バーチャルな世界をリアルに体験できる。戦場で敵と戦ったり、エベレストに登ったり、ニューヨークの街の上を飛んだり、さまざまな体験が自分の部屋にいながらにして体験できる。その世界に入り込む「没入感」が特徴。一方、AR (Augmented Reality) とは「拡張現実」を意味し、話題の「ポケモンGO」に代表されるようにリアルな空間にバーチャル映像が合成される。さらに、VRとARとを融合したMR (Mixed Reality) 「複合現実」という世界も注目を集めている。



写真 vr 1

■ HTC のヘッドマウント・ディスプレイ、Vive (ヴァイヴ) を装着した空を飛ぶ体験ブース

最も注目を集めていたのはHTCの空を飛ぶ体験ブース。ヘッドマウント・ディスプレイを装着して写真のように台の上につ伏せになる。映像ではニューヨークの街が再現され、街並みの上空

を飛ぶ。腕を動かして羽ばたくと上昇し、腕の動きを止めると滑空する。手の動きに合わせて右旋回や左旋回をしたり、首を左右に動かしたりすると、周り景色もその動作に合わせて変化する。ヘッドマウント・ディスプレイの中が自分の世界になる。写真 vr 1 の手前にある扇風機は風を送るためのもの。滑空するスピードに合わせて強弱が調整される。体験者のヘッドマウント・ディスプレイ内の映像は写真 vr 2 のように装置の後ろにあるモニターに映し出されている。これが体験者が実際に見ている風景。バーチャルな世界の中でリアルに飛ぶ感じが味わえる。(写真 vr 1、写真 vr 2)



写真 vr 2

■ HTC ブースでは戦場の疑似体験「FRONT DEFENSE」

ヘッドマウント・ディスプレイの中には戦場が広がっている。コントローラを操作して正面から攻めて来る敵に向かって機関銃を掃射したり、手榴弾を投げつけたりする。戦車はバズーカ砲で撃退する。もし、手榴弾を投げ損じて飛ぶ距離が短いと、自分の近くで爆発が起き、近くの電柱が倒れかかってくるというリアルさだ。ヘッドマウント・ディスプレイには写真 vr 4 のような情景が映し出されている。(写真 vr 3、写真 vr 4)



写真 vr 3



写真 vr 4

■ HTC は VR 技術を駆使した Vive (ヴァイヴ) で新たな分野に挑戦

台湾の携帯メーカーである HTC (宏達国際電子) はヘッドマウント・ディスプレイのオリジナルブランドとして Vive (ヴァイヴ) を展開。精密なトラッキングシステムで、タイムラグなしの別世界をディスプレイの中に再現。まるでその世界にいるかと錯覚してしまうほどの VR 体験を可能にした。クラス最高水準のテクノロジーとコンテンツでいち早く VR の世界に切り込んだ。

HTC ではヘッドマウント・ディスプレイを VR ゴーグルと呼んでいる。(写真 vr 5) 画面解像度 2K (1080 × 1200) の広大でクリアな画質とリフレッシュレート 90Hz の滑らかな描写により、広

大な仮想世界を違和感なく映し出す。ゴーグルには32のヘッドセンサーを搭載。精密な動作追跡を可能にした。また、ゴーグルには外の世界を映し出すためのカメラが1つ搭載されていて、AR対応にもなっている。実際の風景にCGを重ねてバーチャルな世界を表現することもできる。

手に持つコントローラはコンテンツの設定次第で機関銃にも手榴弾にも、剣にも盾にもなる。宇宙船の操縦桿にもパラシュートのブレイクコードにもなる。コントローラにも24のセンサーが搭載されていて、動作を正確に追跡し、手に馴染む形状。操作はコントローラのボタンとトリガーで行う。(写真vr 6) ありとあらゆる動き、ありとあらゆる姿勢での操作を正確にトラッキングし、対角線で最大5 m相当四方の操作空間を実現。広い操作空間を動き回って使うことが可能で、仮想世界がリアルに体感できる。HTCではVRゴーグルとコントローラ×2、スピーカー×2をベースステーションとしてセットで販売している。(写真vr 5、写真vr 6)

<https://www.vive.com>



写真vr 5



写真vr 6

■可動式のシートは360°回転し、VRでリアルに飛行体験/SAMSUNG

Samsungブースでは宇宙船の乗船体験ができるデモを行っていた。ヘッドマウント・ディスプレイを装着して着座し、シートベルトをしっかりと締める。宇宙船の加速に合わせてシートが動き、障害物を回避したり、他の宇宙船とスピードを競い合ったり、シートは映像に合わせて上下左右に激しく動く。まるでジェットコースターに乗っているような感覚だ。可動式のシートは上下が逆さまになったり、360°ぐるぐる回転したり、体験者にとってはけっこうハードな乗船体験。これもVRならではのアミューズメントだ。(写真vr 7)

<http://www.samsung.com/jp/home/>



写真vr 7

■パラシュートを操作して目的地に着地/ Cooler Master

ゲーム PC メーカーも VR に乗り出している。各社とも独自の経験から高性能のゲーム専用 PC、CPU クーラー、ゲーム専用 PC ケースなどの開発に乗り出している。COLOER MONSTAR のブースではパラシュートの落下体験を行っていた。会場に設けられた鉄の骨組みは体験者を宙吊りにするもの。手前のディスプレイに映し出されている映像はヘッドマウント・ディスプレイを装着した体験者が見ている映像だ。体験者は上空から目的地を目指し、パラシュートの紐を引いて降下する。徐々に高度が下がり、着地のタイミングまでをリアルに再現。エンターテインメント用なのか、何かの訓練用なのか、ハーネスからブレイクコードまでリアルに再現されている。(写真 vr 8)

<http://apac.coolermaster.com>

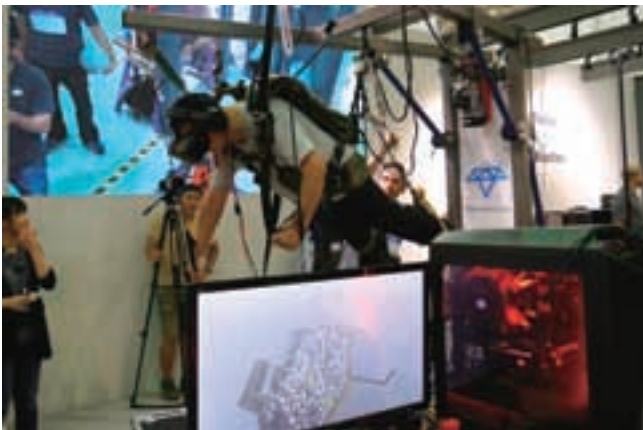


写真 vr 8

■ゾンビを撃退するシューティングゲームを VR で/ Silver Stone

右手に拳銃、左手に懐中電灯を持ち、暗闇の中から次々に迫ってくるゾンビを撃退する。ディスプレイの中の映像は顔を向ける方向に合わせて風景が変わる。まるでゾンビの世界にいるかのよう

な没入感だ。一番怖かったのは、後ろから迫ってくるゾンビ。気づくともう肩のすぐ後ろにまで顔が迫ってきている。前だけでなく、横から後ろからもゾンビが襲ってくる。VR ならではのコンテンツだ。なかなかの迫力。

Silver Stone のゲーム専用マシンは据え置き型のデスクトップ PC ではなく、本体にもディスプレイがあり持ち運びができるタイプ。ゲームの設定を詳細にチューニングしたり、360° VR カメラで撮り込んだ映像を活用したり、ゲーマーたちの集まりでその場でコンテンツ作りを楽しむことができるような配慮。担当者のコメントによると、「ブースの造作は来場者に PR をするために作ったもので、実際はゲーム専用 PC とヘッドマウント・ディスプレイとコントローラがあれば、どこでも遊べる。自宅でも、ゲーム喫茶でも（動き回る空間が必要）、カラオケボックスでも（最適かどうかは疑問）、公園でも（?）、PC があればどこでもできる」という。ゲームの遊び方だけではなく、エンターテインメント自体を根本的に変えてしまうかもしれない。(写真 vr 9、写真 vr10)

<http://www.silverstonetek.com>



写真 vr 9



写真 vr10



写真 vr11

■世界貿易センター第1ホールにサーキットを再現/ GIGA-BYTE

GIGA-BYTEはVRレーシングゲームを出展。GIGA-BYTEのパビリオンには大型ディスプレイが設けられたが、実はこれはVRを体験している人を来場者に見せるためのもの。VR体験者にはステージも大型ディスプレイも必要ない。出展ブースに集まる来場者のためのディスプレイだ。

ドライバーのヘッドマウント・ディスプレイ(Oculus Rift)の中にはレースの世界が広がっている。縁石に乗り上げるとシートが激しく揺れ、急ブレーキや急発進には前後にGがかかる。右を向くと右の風景、左を向くと左の風景がディスプレイに映し出されるのがVR技術。従来のアーケードゲームとの違いはここで、かなりリアルなレーシングゲームだ。

ゲーム専用PC機で家庭でもVRが楽しめるということはワクワクすることであるが、ハイテクでよりリアル体験の追求するアーケードゲームには、さらにそれ以上のコンテンツが登場してくることになる(?)だろう。どこでも誰でも以上にむしろそちらのほうが楽しみだ。近い将来、F1のレース映像の中を自分のオリジナルマシンで走ったり、過去に行われた伝説のグランプリレースにハイテクマシンで参戦したり、そんなゲームが実現するだろう。夢が膨らむ。(写真 vr11、写真 vr12)

<http://www.gigabyte.tw>



写真 vr12

■製品レポート(8) モバイルカメラ DIRECTORシリーズ

◇ Trans Electric Co., Ltd. (大通電子)

<http://www.px.com.tw>

ここからは前回に引き続き製品レポートを掲載する。製品(1)~(7)は「交流」の8月号、10月号をご覧ください。

アウトドアでの使用を考えたモバイルカメラ。衝撃に強い。スノボ、スキー、自転車、などアクティブな使い方を想定。撮影中にスイッチひとつでスローモーションモードに切り替えることができる。撮影後に映像を再生するときスローモー

ションモードで再生をするのではなく、撮影中のワンタッチ操作でモードを切り替えができ、コマ送りのようなスローモーションではなく、きめの細かい映像として記録できることが特徴だ。モードは3段階。「ラジコンカーやドローンに搭載したり、ペットに装着したり、使い方はユーザーの工夫次第・・・」というキャッチコピー。(写真8-1、写真8-2)



写真8-1



写真8-2

■製品レポート(9) スマホカラオケ、Personal portable KTV

◇ Full Power Creative Co. Ltd. (富佳泰国際有限公司) <http://www.fp-creative.com.tw>

商品名は「idol K8」(偶像K吧)、KTVとは日本語のカラオケボックスの意味。スマホに繋いで一人カラオケが楽しめる。実際に試してみたところエコーがしっかり利いていてカラオケボックスで歌っている臨場感がたっぷり楽しめる。専用アプリをダウンロードし、ネットから歌いたい曲を選ぶ。日本語の曲もたっぷりラインナップされている。写真は会場で実際に一人カラオケを試している友人。商品としては優れものだが、傍(はた)から見ると一人で声を張り上げている様子は奇妙(?)な感じがしないでもない。周囲の人には伴奏は聞こえない。完全に一人の世界に没入している。(写真9-1、写真9-2)



写真9-1



写真 9-2

■製品レポート(10) MIO/自転車用ナビ

◇ MiTAC International Corp. (神達電腦)

<http://www.mio.com.tw/>

MIO はパソコンの老舗 MiTAC が立ち上げたナビゲーションシステムのブランド。自転車専用モデルの開発も手掛ける。ナビの機能だけではなく、ハンドルにスマホを装着すれば呼吸や心拍数などのバイタルデータをモニターし、走行中に自分自身のコンディションの確認することもできる。MIO は他にも自動車用の多機能ルームミラー、ドライブレコーダー、クラウドで車載機器とスマホを繋ぐソリューション、ウェアラブルウォッチなど製品も手掛ける。(写真 10-1、写真 10-2)



写真 10-1



写真 10-2

■製品レポート(11) Herb & Fish と Pass & Board

◇ Arky Design Co.,Ltd (桃品國際)

<http://www.arkybrand.com>

ARKY は自分が欲しいと思う物を作るというデザイナー集団。写真 11-1 は Computex Best Choice AWARD を受賞した「Herb & Fish」。スタイリッシュなデザイン、デザイナーの独特な感性が高く評価された。写真 11-2 はさまざま工夫満載の旅行用多機能システム手帳。商品名は「Pass & Board」。スマホの収納スペース、パスポート、航空券だけでなく、国別のお札とコインの収納スペース、SIM カード、SD カード、交通カードなど機能的な収納ポケット、手帳のカバーにはモバイルバッテリー、繰り返し使える Do Check List など、使う人のことを考えたさまざまな機能とアイデアが搭載されている。デザイナーは「自分が海外旅行に行くとき何があると便利かを考えたらこうなった」とコメントする。かなり完成度が高いと思ったが、まだまだ改良を続けていて発展途中だという。ブースには他にもさまざまなアイデア製品が展示されていた。次の Computex ではどんな製品が発表になるか、新しい企画の提案が楽しみなデザイナー集団だ。(写真 11-1、写真 11-2)



写真 11-1



写真 11-2

お勧め。本体にスマホケースを装着するように簡単に取り付けることができ、デジカメを持ち歩くような感覚でスマホが使える。薄型でスタイリッシュでデザイン性もよい。展示されていたのはシンプルな白と黒、木目調などだったが、今後デザインのバリエーションが増えるとますます人気が出そうだ。Computex Best Choice AWARD を獲得。マスコミからも注目されている。こういった製品は代理店を希望するバイヤーがすぐに現れて、海外の市場に出回る。恐らく日本でもすぐに目にすることができるだろう。(写真 12-1 写真 12-2)



写真 12-1

■製品レポート(12) スマホにデジカメのフィーリングを/SNAP シリーズ

◇ bitplay INC. (玩點互動)

<http://www.bitplayinc.com/>

スマホに機構的なシャッター機能を持たせるためのガジェット。画面をタッチして写真を撮るのではなく、デジカメと同じようにシャッターを押して写真が撮れる。スマホをデジカメに変身させるユニークな製品。オプションレンズや専用ストラップもある。スマホにストラップを付けて、デジカメのように使いたいと思っている人にはぜひ



写真 12-2



高雄 (3)一旗山と高雄近郊の都市を訪ねる

片倉 佳史 (台湾在住作家)

台湾南部最大の都市として君臨する高雄市。世界でも屈指の港湾都市であり、産業都市としても名を馳せている。2010年12月に旧高雄県と合併し、現在、高雄市全体では人口約278万を誇り、台南と合わせ、台北に次ぐ都市圏を形成している。今回は高雄郊外の地域を紹介してみたい。

岡山～軍事都市として整備された町

岡山 カンサン (台湾華語・北京語)

岡山 かんさん (ホーロー語・台湾語)

岡山 おかやま (日本統治時代の呼称)

郡役所の所在地

岡山(おかやま)は高雄の北側に位置する町で、台南との中間地点にある都市である。もともとは高雄県岡山鎮(鎮は台湾の行政単位で町に相当)として、高雄市とは別個の都市だったが、現在は高雄市の管轄下にあり、同市の岡山区となっている。

この町の歴史は古い。小さいながらも地域の中枢となっており、賑やかさを誇っていたという。かつては「阿公店」を名乗っていたが、1920(大正9)年の地名改正で「岡山」となった。

日本統治時代、台湾南部には高雄州が置かれていた。高雄一帯から現在の屏東県を合わせた広大な地域を管轄しており、帝国最南端の地である鵝鑾鼻(がらんび)を含んでいた。州内には岡山のほか、鳳山(ほうざん)、旗山(きざん)、屏東(へいとう)、潮州(ちょうしゅう)、東港(とうこう)、恒春(こうしゅん)の各郡を擁していた。

岡山郡については岡山街を中心とし、楠梓(なんし)、燕巢(えんそう)、田寮(でんりょう)、阿蓮(あれん)、路竹(ろちく)、湖内(こない)、弥陀(みだ)の各庄があり、郡役所が全体を管轄していた。昭和17年時の人口統計では、岡山郡の

人口は15万9471名となっていた。

外省人が多く暮らしている都市

この地域は嘉南平原の南端部に当たり、区域全体が海拔100メートル以下の平野となっている。そのため、日本統治時代はさとうきびの栽培、現在は稲作が盛んな土地となっている。かつては見わたすかぎりのさとうきび畑の様子がこの地域の象徴的景観として知られていた。

同時に、岡山は軍事都市としても知られていた。海軍航空隊が置かれ、1939(昭和14)年12月1日には飛行場も設けられた。これは翌年に軍用飛行場となり、帝国南方を護る拠点として機能した。戦時中は米軍の空襲によって大きな被害を出したが、滑走路などは中華民国空軍に接収され、現在も使用されている。

また、戦前に建てられた将校用の官舎なども残っており、独特な集落景観を誇っている。こういった家屋は戦後、本土へ引き揚げた日本人に代わり、中国大陸から渡ってきた幹部将校が住むようになった。また、下級兵士たちも多く台湾に来ており、各地に眷村と呼ばれる軍人集落が形成された。岡山近辺にもこういった集落は多く、他地域に比べ、外省人比率の高いエリアとなっていた。

神社の「神輿」が残されている廟

市街地のはずれには神社が設けられていた。こ



写真1 岡山名物として知られるヤギ肉料理。四川省出身の外省人が持ち込んだ「豆板醬」も岡山の名物とされる。ヤギ肉は「羊肉」と記するのが一般的。



写真2 岡山駅に置かれていたスタンプには「台湾」という文字が入っている。言うまでもなく、日本本土の岡山駅との混同を避けるためのもの。

れは岡山神社と呼ばれ、祭神には天照皇大神、明治天皇のほか、大国魂命、大己貴命、少彦名命、北白川宮能久親王を祀っていた。鎮座式典は1935（昭和10）年12月9日に挙行されたという記録が残っている。当初は無格社だったが、1942（昭和17）年1月24日に郷社に昇格している。

戦時体制下、台湾では各地で人々のアイデンティティを日本人に仕立てていく「皇民化運動」が推進されていた。神社の創建もこれに連動しており、同時期に設けられた神社は例外なく規模が大きかった。これは多くの参拝者が訪れることを想定したためで、岡山神社も新たに公園を設け、

これを神苑に見立てた上で神社を設けたという力の入れようだった。

現在、神苑は中山公園となっている。戦後に統治者として君臨した中華民国政府は台湾に日本の痕跡が残ることを嫌い、さまざまな形で排日政策をとった。神社はすべて廃社となり、中には撤去されるだけでなく、意図的に碑文を削ったり、資材が持ち運ばれたりするところもあった。岡山神社の場合も例に漏れず、荒れるに任されていた。神社の名も消滅し、神苑は中華民国の国父である孫文の号に合わせ、中山公園となった。

公園の入口には鳥居が残っているが、上部は取り払われており、完全な状態ではない。鳥居は朱色に塗色されており、表側には「中山公園」、その裏側には「天下為公」の文字が記されている。

ここからかつての参道を歩いていくと、奥に壽天宮という廟がある。ここは1712年に台南天后宮の媽祖像を分霊したという古刹で、岡山で最も歴史のある廟となっている。もともとは市街地の中心部にあったが、日本統治時代の再開発で1937（昭和12）年に遷移されたという経緯をもつ。そして、敗戦で日本が台湾を去った後、再び建立されたのである。

この廟の前には石獅子が置かれているが、これは神社時代の狛犬である。保存状態が良好なためか、愛嬌を振りまいているようにも見えてしまう。

壽天宮の主殿は1949年に建てられたものなので、古いものではないが、ここには日本式の神輿（みこし）が保存されているのでぜひとも目にしたい。

神輿が安置されているのは主殿のさらに奥にある後殿である。神輿は一对あり、両者とも、往時の姿を保っている。表面には金箔が貼られており、しっかりと磨き込まれているためか、黒光りしている。また、頂部には鳳凰が据え付けられ、存在感を示している。

この神輿は使用されることはなく、展示物のよ

うな扱いとなっているが、重厚感をしっかりと漂わせており、風格が感じられる。台湾で日本統治時代の神輿が残されていることは多くないので、岡山を訪れる際にはぜひとも足を運んでみたい。



写真3 壽天宮に安置されている日本統治時代の神輿。磨き上げられた姿が眩しい。



写真4 旧岡山神社の鳥居。完全ではないものの、往時の姿を保っている。



写真5 壽天宮は庶民信仰の場として参拝客が絶えない。廟の前に置かれた神社時代の狛犬が愛嬌を振りまいている。

鳳山～清国統治時代の水路が残る都市

鳳山 フォンサン（台湾華語・北京語）

鳳山 ふおんそわ（ホーロー語・台湾語）

鳳山 ほうざん（日本統治時代の呼称）

台湾初の灌漑用水路と曹公廟

この一帯はかつて、パイナップルの産地として知られていた。昭和時代に入った頃から、南国・台湾の情緒を表現するものとして、パイナップル畑の様子が絵葉書やポスターに採用されることが多くなったが、その大半はこの辺りの様子だったと推測される。現在は宅地化が急速に進んでおり、以前とは様相が異なっているが、郊外に出れば、今もパパイヤやナツメ、バナナといったフルーツの栽培が盛んで、豊かな眺めとなっている。

清国統治時代、この地には曹公圳(そうこうしゅう)と呼ばれる灌漑用水路が整備されていた。これは台湾最古の灌漑用の水路であり、土地の高低差を利用した簡素なものではあったが、これが後の発展の礎となったのは言うまでもない。

これを手がけたのは清国官吏の曹謹(そうきん)という人物だった。曹謹は私財を投じて、1838年に水路を拓いたとされている。当初、多くの住民は「風水が悪くなる」という理由で用水路の建設に非協力的だったという。しかし、完成後は見違えるように農業が発達し、感謝するようになった。1860年には曹謹を記念した祠が設けられ、曹公祠と名付けられた(後に曹公廟と改称)。

日本統治時代に入った後、1898(明治31)年には第4代台湾総督の児玉源太郎の指示により、改修と拡張が実施されている。この時には、台湾で最初の電動吸水が行なわれた。その翌々年、児玉自身が南部に赴いた際にも、この水路を視察している。この時にも大がかりな改修が決まり、現在の姿となった。

児玉以外にも何人かの要人がこの地を訪れており、曹公廟には第5代台湾総督の佐久間左馬太が

揮毫した扁額が残されている。曹公廟は駅からも近いので、訪ねてみたい場所である。

曹公廟に近い鳳明街という路地を歩いていくと



写真6 曹公圳は下淡水溪の下流域一帯を農耕地に変えた灌漑用水路。今もその流れを確認できる。



写真7 パイナップルは昭和時代に入った頃から生産量が増えた。当時は鳳梨（おんらい）と呼ばれることが多かった。拙著『古写真が語る台湾日本統治時代の50年』より



写真8 曹公廟に残る扁額。第5代台湾総督の佐久間左馬太の名が見える。



写真9 曹公廟は地域信仰の場として機能している。駅からも近い。



写真10 城隍廟に置かれた旧鳳山神社の狛犬。狛犬は移設されて残っている。

城隍廟（じょうこうびょう）がある。ここには鳳山神社に置かれていた狛犬が置かれている。神社の敷地は現在、高雄市立鳳山医院となっているが、神社が廃社となった後、狛犬はここに移された。その経緯については不明だが、考証が待たれる。

なお、この廟の後方には日本統治時代に建てられた木造家屋が数多く見られたが、現在は再開発で一変している。

日本三大無線電信所にも挙げられた通信施設

鳳山には注目すべき戦跡も残っている。海軍鳳山無線電信所は1917（大正6）年に設けられた無線送信所で、海軍無線電信所としては太平洋戦争

開戦の暗号「ニイタカヤマノボレー二〇八」を送信した千葉県船橋送信所や、現在も巨大電波塔が残る長崎県佐世保の針尾送信所が知られているが、ここもそれに並ぶものとされていた。

海軍鳳山無線電信所は1919（大正8）年5月から業務を開始している。同月21日に通信開始の式典が開かれている。無線送信所としては、船橋送信所が首都圏、針尾が西日本と中国大陸方面、鳳山が帝国南部と南洋を管轄していた。いずれも当時としては最先端の技術を駆使したものであった。

訪れてみると、まずはその敷地の広さに圧倒される。奥まったところに管理事務所が見える。これは赤煉瓦造りで、装飾などは一切見られない。屋根は瓦屋根となっているが、低コストの量産型セメント瓦である。奥には同じく赤煉瓦を用いた水塔も見える。

米軍が作成した昭和20年当時の測量図を見ると、円形状の区画が不気味に浮かび上がっている。これは現在も同様で、航空写真を見ると、不自然な円形が鳳山の市街地のはずれに見えるはずだ。これは無線塔を囲んでいたもので、壁が設けられているためにこういった状況になっている。

管理事務所の後方には大きな建物が横たわっている。これは第一送信所で、巨大な倉庫、もしくは工場建築のように見える。ここには機材や電信設備が置かれていた。

大きくて厚い鉄門の存在も、ここが軍事施設だったことを物語っている。内部は吹き抜けになっており、天井が高い。足を踏み入ると、やや湿った空気が全身を包み込んだ。上部にはクレーンが残っており、プレートが確認できた。そこには「株式会社東京石川島造船所」、そして「大正六年」の文字が見えた。

敷地のはずれには第二送信所も残っている。ドーム型の建物を並列させたスタイルの第一送信所とは異なり、こちらは十字型をしており、東西

南北に入口がある。こちらには一部ながら、配電設備や分電盤などが残されている。指令室や地下室、作業場なども残っており、廃墟ではあるものの、往時の様子が想像できる。

戦後は政治犯・思想犯の収容施設に

戦後を迎え、無線電信所は中華民国国民党政府に接收された。そして、無線送信所としての機能は停止され、名も鳳山招待所と改められた。招待所とは言っても、実態は海軍の工作隊が逮捕した政治犯や思想犯を拘禁する場所であり、多くの台湾人青年が苦難の日々をここで過ごした。

筆者は白色テロの受難者である張幹男氏を取材した際にこの場所の存在を教えられ、関心を抱いていた。張氏は「二度と思い出したくない場所」と渋い表情を浮かべたが、白色テロの時代、こういった場所で人生を奪われた青年たちが少なからずいたという事実を改めて思い知らされる。

現在は一般参観が可能となっている。竣工から一世紀を経た現在も当時の姿を留めている戦跡は少なく、そういった意味でも注目されている。MRT（都市交通システム）の鳳山國中駅から歩ける距離なので、気軽に訪れることができる。敷地



写真11 米軍作成の地図。「RadioStation」と記されている。図上にもはっきりと円形が見える。



写真 12 第一送信所。戦後は中華民国海軍が不審者を拘禁する場所として使用していた。洗脳や思想改造なども行なわれていた。



写真 14 海軍無線電信所は船橋と針尾が知られていたが、それと並ぶ日本三大無線送信所の一つとして知られていた。



写真 15 第二送信所は屋内に通信施設の一部が残っている。厚い壁が重苦しい雰囲気を出している。



写真 13 2010年8月30日、この敷地内に残る施設は国定古蹟に指定された。敷地内には防空壕なども残っている。

はとても広いので、時間を多めにとって訪ねてみたいところである。

九曲堂～東洋一と謳われた大鉄橋

九曲堂 チョウチュイタン（台湾華語・北京語）

九曲堂 かうくいたん（ホーロー語・台湾語）

九曲堂 きゅうきょくどう（日本統治時代の呼称）

台湾南部最大の河川と大鉄橋

高雄と屏東の間には下淡水（しもたんすい）溪と呼ばれた大河が流れている。この川の全長は171キロで、中部を流れる濁水（だくすい）溪に次いで台湾第二の長さを誇る。流域面積については

台湾で最大となっている大河川でもある。現在は高屏溪という呼称が一般的で、下淡水溪という名は公的記載には存在しないが、現在も老年世代を中心に旧称が用いられることが少なくない。

この川を跨ぐ橋梁は1913（大正2）年12月20日に竣工した。前例のない難工事であり、完成までには実に3年の歳月を経ている。翌年2月15日には台湾総督・佐久間左馬太の列席のもと、開通式典が盛大に挙行されている。

全長1526メートルという大橋梁は、阿賀野川鉄橋（1242メートル）や朝鮮の鴨緑江鉄橋（945メートル）よりも長く、日本最長となっていた。総工費は130万円。同時期に建設中だった台湾総督府庁舎（1919年竣工）の総工費が280万円であることを考えると、この橋梁がいかに大きな工事であったかが理解できる。余談ながら、台湾にはこの下淡水溪橋以下、大甲溪橋（1213メートル）、大安溪橋（914メートル）、淡水河（889メートル）、濁水溪橋（889メートル）などの大鉄橋があった。

この橋は主構造にトラスを採用している。トラスとは複数の三角形を組み合わせたもので、台湾では造れなかったため、日本で製造されたものが高雄と基隆の両港に運び込まれた。

24連ものトラスが延々と続くその姿は、誰をも圧倒したという。竣工時、多くの鉄道技術者たちが視察に訪れたというが、例外なく称賛の言葉を残したと言われている。

トラスを支える支柱は山口産の石材と煉瓦を混用して外郭を作り、内部にコンクリートを流し込むという手法が採られている。これは増水期を見越した設計で、約12メートルの深さまで埋め込まれていた。流量の変化がここまで多い河川は日本本土では見られないため、独自のものが研究され、実用化された。

この橋梁が果たした意義は大きかった。これまで下淡水溪によって隔絶されていた屏東（へいとう）地方は、新興の産業都市・高雄と直接結びつ

くようになった。広大な平野で栽培された農作物は鉄道を利用して高雄へ運ばれるようになった。そして、この時期、高雄港には主にインドネシアからボーキサイトが持ち込まれるようになり、アルミニウム工業が発達した。これによって、屏東産のパイナップルを用いた缶詰が大量生産されるようになり、その大半が日本本土へ運び込まれていった。

九曲堂（きゅうきょくどう）駅を出た列車はしばらくすると、この鉄橋のすぐ脇を走る。現在、使用されているのは戦後になって付け替えられた複線式の橋梁で、その脇にあるのが戦前に架橋された鉄橋である。この老鉄橋のトラスは腐食が進んでいたため、1964年に付け替えられたが、橋梁その



写真16 鉄道遺産として保存されている旧橋梁。現在、河川敷は公園として整備されている。残念ながら、現在は中程の橋脚が洪水により、流されている。



写真17 トラスが連なる様子。日本統治時代の名は下淡水溪橋梁であった。屏東地区の発展に大きく貢献した。日本統治時代に発行された絵はがき。

ものは一世紀を超える歴史を誇っている。現在は鉄道文化遺産として政府の認定を受けている。

完成を見ずに他界した技師

鉄橋を渡る手前に位置する九曲堂駅は1907(明治40)年10月1日に開設された終着駅である。言うまでもなく、この先、下淡水溪に行く手を阻まれていたため、終点となっていた。

駅舎を出て、右手に進んでいくと、古めかしい石碑が残っている。これは下淡水溪鉄橋の架設に奉職した飯田豊二という技師を記念したものである。

筆者が最初に訪れた1998年当時は深く生い茂った林の中にあり、石碑はバラックの中に埋もれていた。保存状態は決して悪くなかったが、その場所は非常にわかりにくく、探し出すのに難儀した。

現在は不法建築がすべて撤去され、繁茂していた樹木も伐採されている。石碑を中心とした記念公園が整備され、石碑の由来を中国語と英語、そして日本語で記した案内板が設置されている。

石碑の正面に立ってみると、碑面には「記念碑」と三文字だけが刻まれ、非常にシンプルだ。台座には縦44センチ、横69センチのプレートが埋め込まれている。ここには漢文で建碑の経緯が記されている。

それによると、飯田技師は静岡県生まれで、1897(明治30)年、28歳の若さで台湾へ渡っている。1910(明治43)年には正式に台湾総督府鉄道部技師となり、翌年から鉄道部の打狗(高雄)出張所に属する技師として下淡水溪の架橋工事に携わった。しかしながら、過労がたたって病に倒れ、自らが手がけた鉄橋の完成を見ることなく、1913(大正2)年6月10日、台南市で世を去ったという。享年40歳だった。

その後、台湾総督府鉄道部は彼の功績をたたえ、この碑を建てた。1987年4月には複線式の新橋梁が完成し、旧鉄橋は役目を終えたが、屏東地区

の発展を支えた功労者として、1997年4月に産業遺産としての保存が決まった。2005年7月には大型台風が台湾南部を襲い、橋梁の一部が破損。橋脚のいくつかが流されてしまったが、現在は河川敷が公園として整備されている。

石碑は列車からも見る事ができるので、高雄から屏東へ向かう場合は、ぜひとも車窓左手に注目したい。



写真18 架橋工事に奉職した飯田豊二を記念する石碑。郷土史に興味を持った人々がこの石碑を訪れることも増えており、鉄橋とともに歴史遺産の扱いを受けている。

高雄市民の生活を支えた取水口

下淡水溪橋梁の周辺は緑地整備されており、河川敷が公園となっている。台湾では産業遺産に対する関心が高く、行楽客が憩う姿をよく目にする。こういった訪問者たちがすぐ近くに位置する竹寮取水站を訪ねることはほとんどない。

ここは大正時代に整備された取水施設である。設置が決まったのは1910(明治43)年。4カ年事業として整備が進められた。竣工は1913(大正2)年12月。同月から供水が始められた。高雄の水道水はここから送られ、多くの人口を支えてきたのである。

当初は高雄の未来人口を4万人に想定していたという。しかし、高雄の人口は縦貫鉄道の開通や築港完了などによって激増したため、大正5年以

降、何度かの拡張工事が行なわれている。それでも供給は追いつかず、未来人口を10万人とした大規模な拡張工事が行なわれた。

この工事は1930（昭和5）年から2カ年計画で進められたが、自然災害に襲われたり、国庫からの補助減額に遭ったりしたため、完成は遅れた。結局、完成は昭和8年3月を待たなければならなかった。さらに、昭和11年8月29日、高雄市は30年後にあたる1965年の未来人口を40万人とする大高雄市都市計画を立てた。これに合わせ、水源地も昭和13年より、さらに大規模な拡張工事を進めることになった。これは昭和16年に完成し、現在の姿となった。

訪れてみると、赤煉瓦の壁面が強い陽差しに照



写真19 取水口は行楽地ではないものの、幹線道路沿いにあるので、気軽に訪問できる。正式名称は竹寮取水站。



写真20 ポンプ室の様子。現在も高雄市民の水瓶として機能している。

らされている。敷地内にはいくつかの建物が並んでおり、いずれも大きなものである。行楽客の受け入れ体制はできていないが、敷地内を見学することは可能となっている。

旗山～河岸段丘上に開けた都市

旗山 チーサン（台湾華語・北京語）

旗山 きーさん（ホーロー語・台湾語）

旗山 きーさん（客家語）

旗山 きざん（日本統治時代の呼称）

バナナとさとうきびで知られた町

旗山（きざん）はかつて、蕃薯寮（ばんしょりょう）と呼ばれていた都市である。旗山溪によって形成された河岸段丘の上に集落が開けており、山容秀麗な旗尾（きび）山と下淡水溪（当地では旗山溪と呼ばれる）の流れで知られ、台湾十二勝の一つにも挙げられていた。

この地域はバナナとさとうきびの栽培で知られていた。バナナは山肌を利用して栽培され、平地はさとうきびの単作地帯となっていた。いずれも日本統治時代に大きく発達し、戦後の高度成長期に衰退したが、製糖工場は現在も残っており、敷地内で販売されるアイスキャンディーが名物となっている。バナナについては生産量こそ減っているが、最近はバナナを加工した商品の開発が熱心に進められ、地場産品として注目されている。

旗山を散策するにあたって、最初に訪れたいのは旧旗山駅である。ここは九曲堂から伸びていた製糖鉄道の駅で、ここを中心に旗山の町並みは形成されている。残念ながら、鉄道そのものは廃止されているが、旗山のメインストリートである中山路はここを起点に直線に市街地を貫いている。駅周辺には旅館や雑貨屋がわずかながらも残っており、往時の雰囲気を感じとることもできる。

さとうきびの運搬を担った鉄道

この鉄道は屏東（へいとう）に本社のあった台湾製糖株式会社によって運営されていた。九曲堂から美濃（みのう）の竹頭角（ちくとうかく）に到るまでの39・4キロ。旗山は沿線の中で最も賑やかな町だった。

製糖会社が経営する路線だけあって、この鉄道はさとうきびの運搬を目的に敷設された。しかし、しばらくすると、需要に応える形で旅客輸送も始められた。ほかに交通機関と呼べるものがなかった時代だけに、住民にとっては重要な移動手段であった。

旗山の駅舎は小さいながらも独特な風格を漂わせている。建築デザインの世界では左右の対称性が重視されていた時代、ここは異例とも言うべき左右非対称のデザインとなっていた。用材には阿里山の紅ヒノキが用いられたという風聞も存在するが、実際には杉が用いられた。なお、正面左手の八角形の屋根を持った部分には待合室があった。

旗山に限らず、台湾の製糖鉄道は1970年代から製糖事業の不振とモータリゼーション（車社会化）のあおりを受け、次々に姿を消していった。この場合も1978年に営業をやめ、1982年には線路も撤去されてしまった。駅舎は放置され、佻びしい姿を晒していた。もともとが瀟洒なデザインだったこともあり、その様子は痛々しいものだった。

この駅が開業したのは1910（明治43）年8月20日。そして、鉄道が廃止されるまで、この駅舎は常に旗山の玄関口だった。当初は蕃薯寮駅として開設され、1920（大正9）年に地名改正に伴って旗山駅となった。なお、起点の九曲堂駅からは28・5キロの距離にあり、所要時間は1時間半だった。

現在、駅舎は高雄市が指定する古蹟に指定され、保存対象となっている。修復工事を経ているためか、それほど古さは感じられないが、町の玄関口

として長らく機能してきただけあって、しっかりと風格を保っているように見える。

なお、製糖工場は川を挟んで対岸の旗尾に設けられていた。この工場は1910（明治43）年に高砂製糖株式会社旗尾製糖所として創設されたが、後に鹽水港製糖株式会社に売却。しかし、1927（昭和2）年には同社の経営も悪化し、台湾製糖株式会社に移管された。

旗山の砂糖は高品質で知られており、台湾総督府や皇室に献上されたこともあったという。これは「献上糖」と呼ばれ、地域の誇りとされていた。

工場そのものは2003年に操業を止めているが、今も事務所や購買部などがあり、ここで自家製のアイスキャンディーが売られている。アズキ味からタロイモ味、ミルク味、パイナップル味まで10種類近くあり、中にはタロイモ味のような日本では見られないものもあるので、試してみたいかだろうか。



写真 21 現在の旗山駅の様子。線路はすでに剥がされているが、駅舎は修復工事を経て公共空間となっている。

旗山の「老街」を散策

駅舎の正面からのびる中山路がこの町のメインストリートである。バロック風の装飾を正面に施した家屋が並び、壮観な眺めとなっている。これらは大正から昭和にかけて建てられたもので、こういった家並みを台湾では「老街」と呼ぶ。ここ



写真 22 日本統治時代に発行された地図。駅舎の前を走る道がメインストリートで、現在は中山路と呼ばれている。



写真 23 メインストリートとなる中山路にはバロック風の装飾を施した商店建築が並ぶ。商店に倉庫と住居が付随しているのが特色となっている。



写真 24 旗山の家並み。古くから商業都市として栄えていた旗山だが、日本統治時代の都市計画によって一変した。その様子は台湾十二勝にも挙げられていた。『日本地理大系』より

に限らず、各地で見られるが、旗山は中でも保存状態がよく、多くの行楽客が訪れる。

この老街を進んでいくと、左手に1817年に開かれた旗山天后宮がある。この廟は媽祖を祀り、正殿は老街に背を向けるように建っている。これは旗山の市街地が日本統治時代に都市計画で整備されたことによる。つまり、元来の集落は廟の前

方にあったが、廟の背後に日本人が新しい市街地を造ったため、廟は目抜き通りに背を向けているような形になったのである。

なお、この一帯には味自慢の屋台や食堂が並んでいる。中でもアヒル肉を漢方薬で煮込んだ「當

「歸鴨肉」は旗山名物として知られている。少々クセはあるものの、ぜひとも試してみたい郷土美食だ。麺とともに供する店が多い。

その先、華中路との交差点には旗山が誇る名物店「枝仔冰城」がある。ここは全島で知られたデザート店で、かき氷やバナナキャンディーなどで知られる。中でも「芋仔聖代(タロイモサンデー)」は人気が高い。

武徳殿と公学校

華中路を左折すると、左手に旗山武徳殿が見えてくる。ここはかつての武道教練場で、竣工は1934(昭和9)年。戦後は長らく警察署として使用されていたが、武徳殿としての姿は留めていた。しかし、1994年10月16日に火災が起り、壁面と鉄筋コンクリート構造の部分を残して灰燼に帰してしまった。

それでも、建物を修復し、郷土のシンボルにしようとする運動が市民から起き、これを受ける形で2000年7月から修復工事が始まった。この工事は翌年には完成したものの、日本式の黒瓦を台湾で入手するのは困難だったため、屋根に透明なガラス板が貼り付けられてしまった。完成後はカフェ・レストランとして使用されていたが、その外観はミスマッチな印象を拭えず極めて不評だった。

後に、本来の姿に復元してこそ、歴史を後世に伝えていく意義があるという声上がり、再度、修復工事が施されることになった。

この工事は2014年12月21日に終わり、現在は竣工当初の様子に戻っている。建物の後方には日本統治時代の教官が暮らした木造家屋もあるので、こちらものぞいてみたいところである。

旗山武徳殿の向かいにある旗山国民小学には日本統治時代の講堂が残っている。こちらは一見の価値があるので紹介しておきたい。この学校の歴史は古く、1898(明治31)年10月7日に蕃薯寮公

学校の名で開設された。台湾が日本の統治下に入ってからわずか3年後のことである。

この学校の校舎は日本統治時代のものが残っており、講堂とともに保存対象となっている。校舎は大きな建物ではないが、2000年5月31日に古蹟の認定を受けた。

講堂は1934(昭和9)年12月5日に竣工したという記録が残る。使用されたのは翌年からだったが、当時は旗山を代表する大型建築だったため、学校行事のみならず、式典や集会などがここで行なわれたという。長年、風雪に晒されていただけに建物の傷みは大きかったが、現在は改装工事を経ており、美しい外観を取り戻している。



写真25 旗山武徳殿。武徳殿は日本統治時代、ある程度の規模の都市であれば、どこでも設けられていた。現在もいくつかの武徳殿が往年の姿を保っている。



写真26 かつての旗山武徳殿の様子。屋根に貼られたガラス板が不釣り合いな印象だった。2006年撮影。



写真 27 旗山には公学校のほかに内地人子弟が通うことを前提に設けられた尋常小学校もあった。こちらも校舎は残っており、公共スペースとなっている。

旗山神社の遺跡

旗山の市街地を見おろせる丘は「鼓山公園」と呼ばれている。ここには旗山神社が設けられ、公園全体が神苑となっていた。

神社の鎮座式は1936（昭和11）年10月30日に挙行された。そして、毎年11月10日に例祭が執り行なわれた。ここは眺めの良さで知られ、神社から眺めた旗山の家並みは絵はがきにも取り上げられ、神社そのものが景勝地の扱いを受けていた。

この神社の規模は大きかった。これも先述した岡山のケースに酷似しているが、創建年代が皇民化運動に合致するため、神社の施設は大掛かりなものとなっていた。

旗山神社の場合、台湾全土を見回しても、ここまでの規模を誇る神社は多くない。本殿や拝殿については痕跡を残していないので、往時の姿は古写真に残るばかりだが、やはり、大きな建物だった。

敗戦によって日本人が引き揚げた後は管理されることもなく、神社関連施設は荒廃していたという。新たな統治者となった国民党政府は排日政策を推し進める中、石灯籠を破壊し、敷地には孔子廟を建てた。神苑は公園となったが、ここがかつて神社だったという史実は意図的に覆い隠されていた。

現在、敷地の片隅に日本統治時代の石碑が残っている。これは台湾総督・佐久間左馬太が揮毫した「精忠護国」と刻まれた石碑である。表面は苔むしているが、保存状態は悪くない。国民党政府は「伯爵佐久間左馬太」の文字をセメントで埋めていたが、半世紀以上の歳月を経て、今は判読が可能となっている。

さらに、近くにはやはり日本人の手で設けられた「駐軍記念碑」も残っている。こちらは樹木に埋もれた形になっているが、保存状態は良好で、はっきりと文字も判読できる。

今回は高雄市美濃と山岳部地域を紹介してみたいと思う。



写真 28 旗山の家並み。右手に広がるのは旧陸軍練兵場。中ほどに見えるのは旗山公学校の講堂。のちに手前に旗山武徳殿が建てられた。『日本地理風俗大系』より



写真 29 鼓山公園は旗山神社が鎮座していた場所で、敷地全体が神苑とされていた。中央の奥に見えるのは旗尾山。日本統治時代の絵はがき。



写真 30 旗山神社は大国魂命、大己貴命、少彦名命、北白川宮能久親王と安徳天皇を祀っていた。石灯籠は一度、国民党政府の独裁時代に破壊されたが、再整備されている。



写真 32 精忠護国の碑の近くには駐軍記念碑も残っている。



写真 31 佐久間左馬太総督が揮毫した「精忠護国」の碑は今も姿を留める。



写真 33・34 太平寺前の橋。霊鼓山太平寺は明治 42 年 12 月、旗山神社の脇に開かれた。本堂の前には水路があり、これは現在も見ることができる。

片倉佳史 (かたくら よしふみ)

1969 年生まれ。早稲田大学教育学部卒業。台湾に残る日本統治時代の遺構を探し歩き、記録している。これまでに手がけた台湾のガイドブックはのべ 35 冊を数える。そのほか、地理・歴史、原住民族の風俗・文化、グルメなどのジャンルで執筆と撮影を続けるほか、台湾の社会事情や旅行情報などをテーマに講演活動を行なっている。著書に『台湾に生きている日本』(祥伝社)、『旅の指さし会話帳・台湾』(情報センター出版局)、『台湾に残る日本鉄道遺産』(交通新聞社)など。2012 年には李登輝元総統の著作『日台の「心と心の絆」～素晴らしき日本人へ』(宝島社)を手がける。最新刊は台北生活情報誌『悠遊台湾』、『観光コースでない高雄・台南編』(高文研)を近刊予定。

ウェブサイト台湾特捜百貨店 <http://katakura.net/>

交流協会事業月間報告

主な交流協会事業 (10月実施分)

10月	場所	内容	主な出席者 (日)	主な出席者 (台)
9月30日～10月13日	台北	彦十蒔絵・若宮隆志芸展 (後援名義事業)		
1日	東京	台湾協会主催「台湾関係邦人物故者慰霊法要」に柿澤総務部長 (本部) が出席	森田高光・台湾協会理事長	
5日	台中市	台中市政府庁舎における第1回領事出張サービス除幕式	代表、浜田部長、谷川主任、寺山主任 (台北)	林陵三・台中市副市長、陳盛山・同市観光旅遊局長、黃正芳・同市主任秘書、許世楷・元駐日代表ら
5日	台中市	領事出張サービス	谷川主任 (台北)	
3日～7日	台北、新竹、高雄	「台湾ハイテク企業による対日投資に関するセミナー」(主催: 理律法律事務所、後援: 交流協会他)		
6日	東京	駐日台北経済文化代表事務所主催双十節レセプションに大橋会長、今井理事長らが出席	岸信夫・外務副大臣、古屋圭司・衆議院議員、衛藤征士郎・衆議院議員、山東昭子・参議院議員、福田康夫・元総理 他	謝長廷・駐日台北経済文化代表事務所代表 他
7日	台北	秋田銀行開所式	中島 秋田県副知事、沼田代表、花木副代表、中川主任 (台北) 他	蔡明耀・亜東協会秘書長、莊琇媛・金融監督管理委員会銀行局副局長 他
7日	東京	「台湾エクセレンス」開幕式に舟町専務が出席		張厚純・駐日台北経済文化代表事務所経済組長、吳俊澤・台湾貿易センター所長 他
8日	台南市南瀛線都心	台南国際民族芸術節の開幕式に中郡所長が出席	中郡所長夫妻 (高雄) 他	頼清徳・台南市長、葉澤山・台南市文化局長、黃崑虎台湾之友会総会長 他
9日	苗栗	全国青少年太鼓コンクール (後援名義事業)	塩見和子・日本太鼓財団理事長、内田日本語専門家 (台北) 他	王妙涓・台湾太鼓協会理事長 他
10日	台北	双十節記念式典	古屋圭司・衆議院議員、沼田幹夫代表 (台北)、中郡錦蔵所長 (高雄) 他	蔡英文・総統、陳建仁・副総統 他
14日、15日	台南市總爺藝文中心	台南市政府文化局主催「和風文化際」の前後祭及び開幕式に中郡所長が出席	山口雅功・山中漆器連合共同組合理事長、大下元行・石川県伝統工芸士会会長、堀江祐子・加賀九谷陶磁器共同組合理事長、柏田剛明・石川県九谷焼美術館副館長、中郡所長 (高雄) 他	頼清徳・台南市長、葉澤山・台南市文化局長、黃偉哲・立法委員、葉宜津・立法委員、郭貞慧・台南市台日友好交流協会理事長 他
15日	台北	第2回日本語教育研修会 (主催)	青木・大阪大学教授、塩澤文化室主任、日本語専門家 (台北)	日本語教師・青木直子大阪大学教授
16日	台北	全国高校生日本語スピーチコンテスト (後援名義事業)	塩澤文化室主任、日本語専門家 (台北)	蘇克保・東呉大学日本語学科主任 他
17日	台北	日台産業協力架け橋プロジェクト「日台イノベーション動向セミナー・商談会」(主催: NPO 法人高周波・アナログ半導体ビジネス研究会、交流協会、協力: 工業技術研究院他)	花木台北事務所副代表 (台北) 他	徐竹先・TXA 創新加速器公司総経理 他
18日	台北	「台湾グローバル連携交流会」(主催: いわき産学官ネットワーク協会他、後援: 交流協会他)		
19日	台北	「太陽の子」上映会及び野嶋剛氏トーク (文化ホール貸与事業)	野嶋剛氏	
19日～11月1日	台北	2016おしゃべりコンサート I N台湾 (後援名義事業)	千葉章代氏、派遣員 (台北)	
20日	高雄展覽館	台湾内外の水ビジネス企業等が出展する「台湾国際水展」開幕式に山下次長が出席	山下次長 (高雄)	陳菊・高雄市長、黃文榮・TAIT-RA 秘書長、頼国星・經濟部国際貿易局高雄弁事処長、頼建信・經濟部水利署副署長 他
20日	内政部移民署台南市第一服務站	鈴木主任及び現地職員1名が移民署台南市サービスステーションにおいて領事出張サービスを実施	鈴木主任 (台北) 他1名	在留邦人
21日	高雄展覽館	日台産業協力架け橋プロジェクト「日台水ビジネス商談会」(主催: 大阪商工会議所、交流協会、協力: 工業技術研究院他)	山下次長 (高雄)、成田次長 (本部)、吉村保範・大阪商工会議所経済産業部産業・技術・水ビジネス振興担当課長、民間事業者	蔡容寧・工業技術研究院服務創振興商業發展部專案副理
22日	台北市	台北日本人学校スポーツフェスティバル	谷川主任 (台北)	
22日	台中市	台中日本人学校秋祭り	谷川主任 (台北)	
22日	台北	台湾大学日本研究センター・中華経済研究院主催「TPP フォーラム: 日台加盟の影響と展望」(台湾大学主催)	鈴木元経産省通政局長、浜田部長、宮越主任、大橋主任 (台北) 他	鄧振中・行政院政務委員、蘇顯揚・中華経済研究院日本語中心主任 他
22日	台北	美麗和服・日舞文化学苑学苑祭 (後援名義事業)	派遣員 (台北)	
22日	東京	東京華僑総会創立70周年大会に柿澤総務部長 (本部) が出席	赤枝恒雄・衆議院議員、魚住裕一郎・参議院議員、石井章・参議院議員、大江康弘・亜東親善協会会長 他	謝長廷・駐日台北経済文化代表事務所代表、郭仲熙・同副代表、張仁久・同副代表 他

10月	場所	内容	主な出席者（日）	主な出席者（台）
24日	台北	「台湾・高知県防災フォーラム」、「防災先進県高知発の製品・技術商談会 in 台湾」（主催：高知県他、後援：交流協会他）		
25日	高雄	「台湾・高知県防災セミナー in 高雄」（主催：高知県他、後援：交流協会他）	中澤一真・高知県商工労働部長、山下次長（高雄） 他	蘇志勳・高雄市政府工務局副局長 他
26日	台北	日本政策金融公庫セミナー（交流協会後援名義）	黒田公庫専務取締役、花木副代表、中川主任（台北） 他	
27日	和歌山	「台湾ビジネスセミナー in 和歌山」（主催：和歌山県、台北駐日経済文化代表処、交流協会、わかやま産業振興財団）	成田貿易経済部次長（本部）、他	張厚純・駐日台北経済文化代表事務所経済組組長 他
27日	東京	台新銀行東京支店開設レセプションに今井理事長、舟町専務が出席		
29日	台中市	台中日本人学校学習発表会	谷川主任（台北）	
29日	高雄日本人学校	高雄日本人学校の運動会に中郡所長夫妻が出席	貝谷盛富・台湾日本人会高雄支部長、山野辺康徳・同学校運営委員長、中郡所長夫妻（高雄） 他	賈楽吉・高雄市政府警察局荖雅分局長
29日	台北	国際交流基金公募事業説明会（主催）	塩澤文化室主任、日本語専門家（台北）	
29日	台北	きもの着付けショー（文化ホール貸与事業）		
31日	東京	日台海洋協力対話 第一回会合	大橋会長、今井理事長（本部） 他	邱義仁・亜東関係協会会長、謝長廷・駐日台北文化経済代表事務所代表 他
31日～11月4日	台北市	平成28年度後期ワーキング・ホリデービザ申請受付	山田主任（台北）	

交流 2016年11月 vol.908

平成28年11月25日 発行

編集・発行人 舟町仁志

発行所 郵便番号 106-0032

東京都港区六本木3丁目16番33号

青葉六本木ビル7階

公益財団法人 交流協会 総務部

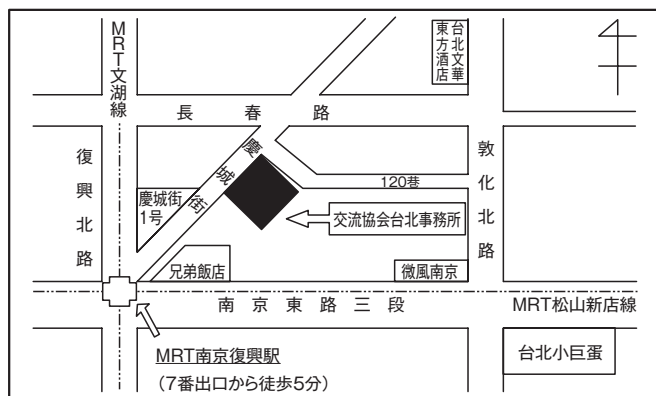
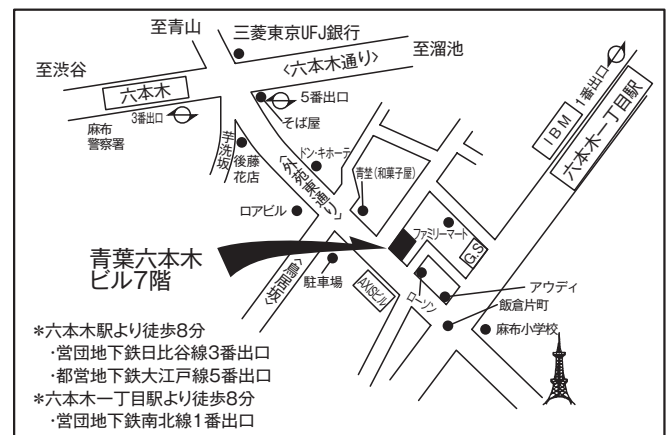
電話 (03) 5573-2600

FAX (03) 5573-2601

URL <http://www.koryu.or.jp>

表紙デザイン：株式会社 丸井工文社

印刷所：株式会社 丸井工文社



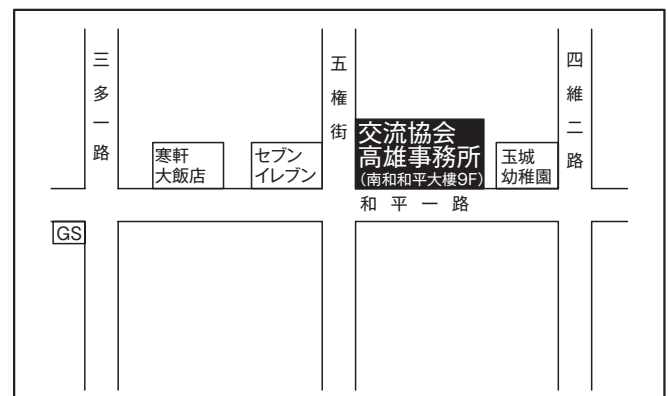
台北事務所 台北市慶城街28號 通泰大樓

Tong Tai Plaza, 28 Ching Cheng st., Taipei

電話 (886) 2-2713-8000

FAX (886) 2-2713-8787

URL http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3_contents.nsf/Top



高雄事務所 高雄市荖雅区和平一路87号

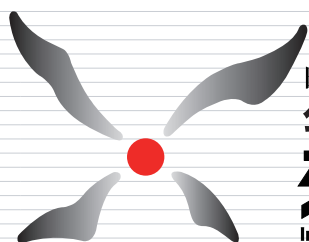
南和和平大樓9F

9F, 87 Hoping 1st Rd., Lingya Qu, kaohsiung Taiwan

電話 (886) 7-771-4008 (代)

FAX (886) 2-771-2734

URL http://www.koryu.or.jp/kaohsiung/ez3_contents.nsf/Top



日本と台湾との架け橋

公益財団法人

交流協会

Interchange Association, Japan (IAJ)

